

タイトル:平成 23(2011)年度 研究セミナー

日程:平成 23 年 12 月 19 日(月)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「14 世紀前半のコプト聖人像」

辻 明日香(東京大学東洋文化研究所助教)

中東☆イスラームセミナーが発足して最初の年に、教育セミナーに参加させていただきました。その頃から、いつか研究セミナーに参加してみたいと思っていたのですが、博士論文の準備がある程度整ってから、とずると年月が経っていきました。そして、今年こそ応募しないともう後がない、とようやく重い腰をあげ応募したところ、有難いことに参加させていただけることになりました。

非常に充実した三日間でした。これは皆さんが書かれていることですが、やはりセミナーの良い点として、先生方が真摯にこちらの研究テーマと向き合ってくださいること、普段は知り合う機会がない他分野の方々を知り合いになり、世界を広げることができる点が挙げられます。

博士論文の準備をする際、方法論や史料の扱い方は卒業論文以来指導を受けてきているため、ある程度は自分で理解しています。けれども、史料を読み進めながら湧いてきた考えや、そこから見えてくる論文の方向性が、それは思いつきにすぎないのか、それとも発展性があり学問とし意義があるのかどうかは、本人にとりなかなか判断しにくく、ここで多くの時間を費やすこととなります。学会や研究会の報告ですと、このような生煮えのアイデアは封印せざると得ません。

研究セミナーでは、上記のような、博士論文に書きたいが方向性として不安があるアイデアをほぼすべて、しかもあまり整理されていない状態で報告させていただきました。先生方や他の参加者方に多大な負担をかけてしまい、申し訳なかったです。とても驚いたことに、これら未完成のアイデアの一つ一つを丁寧に拾い上げ、コメントしていただきました。博士論文としてはまだまだ未完成で、課題は山積していますが、方向性について迷っている段階で、このように丁寧に時間をかけて向き合っていただけたことは大きな後押しとなりました。

また、他分野で博士論文を準備している方々の報告を聞いたことも大変収穫となりました。私は歴史学の分野が専門ですが、その中での研究傾向を知っていても、中東研究全体として、今後どのような研究ができてそうか、ということはこのような機会でない限り、なかなか知ることができません。さらに、学会で報告を聞く機会があっても、限られた時間と空間ゆえ報告者と会話をすることは難しいため、三日間続くセミナーは有難い時間でした。

教育セミナーで知り合った参加者とは、その後国内外で再会することがあります。中東☆イスラームセミナーの参加者のその後、というのは個人的には興味がありますが、まずはこのようなセミナーを今後も続けてくださることを願う次第です。スタッフの方々の、お仕着せではない親切かつ誠意ある対応自体、セミナー参加者は得ることがたくさんあると思います。その背後にある多大な準備時間、そして期間中の拘束時間に目眩を覚えつつ、まずは御礼申し上げます。